

珍し物好き、興味旺盛な母がオリーブオイルを我が家で使いだしたのは私が10歳くらいの時だっただろうか（それは1990年頃を指す。）『高いものだからちょっとだけ炒め物に使ったり、サラダにかけたりするのよ』と紹介されたそのオイルを私はなんか変な匂いの、苦みがある頂けない味だなと思ったのを覚えている。でもその風味にもなれて、特に自分がアメリカに住むようになってからはごく日常的に使うようになった。生活をヨーロッパに移した近年では、ともすればオリーブオイルしかキッチンに置いてなくて、ちょっとした中華炒め物までオリーブオイルだったりもする。オリーブオイルと一括りにしても千差万別、ピンキリで、濃厚で美味しい物はオイルだけでもおいしなあーなんて事も分かるようになった。

そんなオリーブと言う食べ物、もしくは植物に近からず遠からずだった私に、去年の夏（2008年）のとある友達の言動、もしくは彼に起こった出来事は当初気に留める事もない些細な、しかし時間が経つにつれ震度を増した衝撃的な事となった。

その日久しぶりに会ったアーティスト友達、ギリシャ系ドイツ人のアレックスは、私にギリシャで発生した鎮静されていない山火事の話 시작했다。乾燥地帯のギリシャでの山火事は大変な事なのはともかく、彼の一番の怒り、悲しみはどうやら火事によってたくさんのオリーブの木が燃えてしまった事らしい。しかも、ギリシャで一番大切な象徴的なオリーブの木さえ燃焼してしまっらしい。彼はある意味国をなくしてしまったような、プライドを打ち破られたような屈辱と悲しみのため数週間ほど家から出る気分にもならなかったと言った。私は大げさだなと思いつながら、適当な相づちでアレックスをなだめた。

しかし時間が経つにつれて、それって凄いなど、国民のプライドや国民性が一本の木に要約されるというのはいったいどういう事だと思いつ始めた。私はその木をみた事もなければ、焼失してしまったならばみる事もないその木に思いを馳せ始めた。食物や石けんの材料としてギリシャ人の生活に密着してるオリーブ、車窓からの風景、または庭の植木として人々の生活の一部であるオリーブ、それでもって守り神のような地位までを得てしまったオリーブ。そんなオリーブの木と私はどうにか関わりが持ちたくなつた。

関わりとはその木を何とかして見る事かもしれないし、その木をどうにかして記録する事かもしれない。または直接的にではなく、人々の記憶や感情の中にあるその木を模索する事によって私はその木と関係を持つようとしてるのかも知れない。明確な目的地を持たないまま、私のこのオリーブの木と関わりを持つと言う試みはここから始まる事になる。（2009年5月10日）